

Play KENJI

「修羅ニモマケズ」

石川裕人

登場人物

けんちゃん  
猫

郵便屋

運転手

山猫さま

どんぐりー

2 3

又三郎

楽隊員

ミーロ

テーモ

ファゼーロ

パーゴ

5 4 3 2 農民 | シグナレス 4 3 2 汽車の客 | 子ども | 3 2 |

革のトランクを持った黒いコートの男と、木の扉を背負った猫がやってくる。

猫 けんちゃん、ちよつと休まないか？

けんちゃん さっき休んだばかりじゃないか、

猫 さっきの休憩はたった三十分だった。

けんちゃん 三十分も休めば充分だろ？

猫 なんのなんの。

けんちゃん 駄目なのかい？

猫 猫にとっての休憩とは、

けんちゃん きみの講釈は聞かなくて結構。

猫 講釈喋らせないように休ませろ。

けんちゃん ぼくは急がなければならぬ。

猫 わかつてるよ。

けんちゃん 一人で行くよ。

猫 いいのか？一人で行って。

けんちゃん

妹が病気で倒れたんだ。(トランクを示し)妹はぼくの童話を読みたがっている。ぼくの童話を読めば病気も治るかもしれない。だから早く行ってやらないと。

猫

(扉をおろしながら)これはどうするんだよ?

けんちゃん

猫

これも一緒に背負っていくならどうぞ勝手にしやがれ声。背負えるもん

なら背負ってみやがれ声。MIYYAGON!!

けんちゃん

そうか、それがあつた。

猫

体の弱いお前さんのたつての頼みだから、おらあ猫の事務所の煩雑な業務をほっぽり出してこの重い扉を背負ってやってここまで来たんじゃないか。それもアルバイト代など請求もしない極めてボランティア精神にあふれた清い心で、だ。

けんちゃん

(小声で)つまらなそうに仕事してるから誘ったんだ。

猫

なに?

けんちゃん

そうでした。

猫

多分おらあ首だよ、首。猫の事務所の五番書記まで出世したのにお前さんのたつての頼みを聞いてやったばかりに首だよ。くにのおっ母さんは嘆くだろうね。

けんちゃん

ごめん。

猫 ごめんじゃすまないよ。

けんちゃん じゃあ、ろくめん。

猫 そういうことじゃなくてさ、おらと一緒に猫の事務所に行って何故に  
おらが突如業務をほっぽり出すことになったのか事務長に弁明してくれ  
よ。

けんちゃん 今からかい？

猫 だって一人で行くんだろ？お前さんがあの町に帰ってくるまで職なしの  
野良猫になれていいのか？

けんちゃん あの町に戻ってる暇はないよ。

猫 だったら連れてけ。

けんちゃん わかったよ。

猫 一人で行くなんて言わないな？

けんちゃん 言わない。

猫 よし、それなら休ませろ。

けんちゃん だからそれとこれとは別だろ？

猫 これがどんなに重いかわかってるのか？

けんちゃん ；わからぬ、

猫 背負ってみろよ。

けんちゃん

やめとくよ。ここで倒れたくないから、

猫

その方がいい、歩きづめで顔色が悪いぞ。

けんちゃん

駅までたどり着けばあとは一人でもなんとか、

猫

それはない。一人では行かない。おらと一緒にどこまでもだ。

けんちゃん

(ため息をつき) 声かけなければよかった。

猫

なに？

けんちゃん

いいよ、休んで。ぼくも休もう。

猫

そうこなくっちゃ。この休憩が後々効果が出てくる。

けんちゃん

どういう？

猫

え？

けんちゃん

どういう効果？

猫

まあ…、ニャンゴロリン効果って言ってな、人間にはわからないな。

けんちゃん

猫だからね。

猫

そうね、猫だからね。

風。

猫 ところでこの扉なんだけど、どこの扉？

けんちゃん ぼくのアパートの部屋の扉。

猫 あのおんぼろアパート、月夜荘二〇二号の？

けんちゃん おんぼろっていうなよ。

猫 正直に言ったままでさ。

けんちゃん 確かに築四十年はたつアパートだけど、ぼくは住みやすかった。

猫 住めば都はるみだからな。

けんちゃん きみも良く泊まったろ？

猫 ああ、仕方なくな。

けんちゃん 仕方なく餌も食べたというわけだ。仕方なくぼくの布団も占領し、仕方

なくぼくの原稿書きも邪魔をした。

猫 おらがいることでお前さんも淋しさがまぎれたろ？

：そうかもしれない。

猫 しかし、お前さんも不思議なことをするもんだ。なんで故郷へ帰るのに  
アパートの扉を持っていくんだい？第一泥棒に入られたらどうするの  
さ？

けんちゃん 泥棒のことに関してなら泥棒が喜ぶような金目の物は一切ないよ。

猫 泥棒がかえって何か恵んでいくかもしれない。

けんちゃん

猫　　で、扉は？

けんちゃん　　誰かが訪ねてくる。

猫　　誰かって誰？

けんちゃん　　ぼくの童話を読んでくれた出版社の人。

猫　　編集者って人種だね？

けんちゃん　　もしかしたら本を出してくれるかもしれない。

猫　　はあ……、

けんちゃん　　それにぼくに童話のヒントを与えてくれる訪ね人がやってくるからその

扉だけは持っていけないと駄目なんだ。

猫　　（つくづくけんちゃんの顔を見て）

けんちゃん　　なにか顔についてるかい？

猫　　お前さん、

けんちゃん　　え？

猫　　人間だよな？

けんちゃん　　真面目にそう聞かれると自信なくなってしまうな。

猫　　おい！！

けんちゃん

に、人間だよ。

猫

人間社会には色んな面倒くさいルールがあるよな？

けんちゃん

うん、あるある。

猫

「人は住所に訪ね行く」

けんちゃん

人は住所に訪ね行く。ふむふむ、なるほど。

猫

なるほどじゃなくてさ、訪ねてくる人々はなんとか市かんとか町何丁目何番地を訪ねてくる。お前さんも他人の家を訪ねていくときはそうするだろ？

けんちゃん

そうだね。

猫

お前さんの現住所は？

けんちゃん

東京市本郷区菊坂町七五番地。

猫

だろ？編集者はそこへ訪ねていく。この扉を訪ねてくるわけじゃない。

けんちゃん

そうだろうか？

猫

そうだろうか？

けんちゃん

だって、ほらもう訪ねて来ているよ。

音楽

郵便屋 (コンコンと扉を叩く)

けんちゃん はい。

郵便屋 みやざわけんじさんのお宅ですね？

けんちゃん そうです。

郵便屋 現金書留です。

けんちゃん ありがとうございます。待ってたんですよ、それを。それがないとふるさとに帰れなかつたんです。

猫 文無しかよ。よくそれでアパートを出てきたな。

(扉を開ける)

判子をください。

(判子を出す)

郵便屋 (判子を捺し) なんだか獣の匂いがしますなあ。

猫 獣だと？

郵便屋 (書留の匂いを嗅ぎ) これだあ。

郵便屋 それじゃ確かに。

けんちゃん 御苦労さまでした。

郵便屋去る。

猫、こっそり出てくる。

けんちゃん

(猫を見て) なに怒ってるんだい？

猫

怪しい奴、何者じゃ？

けんちゃん

郵便屋さんだよ。

猫

あいつこそ獣の匂いがしたぞ。

けんちゃん

君こそ獣だろ？ (書留の差出人のところを見て) 誰からだろう？ 親父ならちゃんと書いて寄越すはずなのに。(書留の封を切り中を改める) あれ？

猫

どうかしたか？

けんちゃん

(一枚の便せんと大きな葉っぱが出てくる)

猫

(便せんを覗き) 汚ったない字だな。ミミズが書いたのか？ それにお金じゃなくて葉っぱだ。

けんちゃん

「みやざわけんじさま 九月〇〇日 あなたは、ごきげんよろしいほで、けっこです。あした、めんどなさいばんしますから、おいでんなさい。とびどぐもたないでくなさい。山ねこ 拝」

猫

山ねこ？ 山ねこっておらたちの仲間では三番目に偉い種族だ。

けんちゃん

あしたって急に言われてもなあ。

猫

山ねこさんは困っているようだね。あの偉いお方に何があったんだろ  
う？それになんて寄りによって優柔不断なお前さんに裁判のことなんか  
相談するんだ？

けんちゃん

本当だよ、ぼくには人を裁くなんてこと出来ない。

猫

名前がけんじなになあ。

けんちゃん

(にっこりして) 面白い洒落だね。

猫

そうかあ！？

けんちゃん

でも山猫さんのたつての頼みを断るのも忍びないなあ。

猫

相談に乗ってやってくれよ。おらも山ねこさんにお目通りしたいし、そ  
れにお前さんの妹も命が危ないってわけじゃないんだろ？

けんちゃん

うん、そんな大変なことはないんだけど、早く帰って童話を読ませたい  
んだ。

猫

でも、帰るお金がないんじゃない？

けんちゃん

そうだよね。

猫

もしかしたら山ねこさんはお礼に金一封をくれるかもしれない。

けんちゃん

(葉っぱを) 金一封ってこれかな、これでは汽車に乗れないよ。

また誰かがやってきたようだ。扉をノックする音。

けんちゃん

はいはい。どなたですか？

声の主

みやざわけんずさんのおだぐですか？

けんちゃん

はい、そうです。

声の主

わだぐすやまねごさまがらいいづかっておむがえにやってまいっだワイ  
ルドギヤツト・タグスーのものです。

猫

ずいぶん訛ってるなあ。

けんちゃん

(扉を開けて) ご苦労さま、

運転手

いやあやつとみづげますたあ！さいしよとごろばんつのとーちよーほん  
ごーのあぱーとにいったんだげつともね、とびらがなくでおまげにだれ  
もいないんだものや。それがらとびらさがしてなんぜんりだ。

けんちゃん

よく見つけましたね。

運転手

かみわざだなこりや、どれはやぐいぐすべ。

けんちゃん

はやぐいぐすべって言われても、

運転手

なんがもんだいあんのすか？

けんちゃん

お金がないんです。

運転手

あんだてにもってっすべ。

猫

運転手

やっぱりその葉っぱ金一封だ。

はやぐつれでいがねどやまねごさまがらかみなりおどされっがらいそいでしたぐしてけろ。

けんちゃん

強引だな。

猫

運転手

こりや行かなくちやいけないつてことだな。

(猫に) あんだもいぐのすか？

猫

運転手

行くよ。

あんだはたぬぎすか？

猫

運転手

失礼な、猫だ。

ねご？ぺつとすか？

けんちゃん

そういうわけじゃ。

運転手

やまねごさまのどごろにねごをつれでっていいものだべがなあ。

猫

運転手

いいに決まってるじゃないか、同族だよ。

このまえもあんだのようなねごがまよいこんできたんだげつとも、やまねごさまはそのねごをくいころしたすと。

猫

けんちゃん

えー!?

行くのやめようか？

行進曲に乗って噂の山猫、そしてどんぐり達がやってくる。

運転手

(それを見つけて) こりやまずいど、ちよつとながにいれでけろ。

けんちゃん

どうしたんですか？

運転手

いいがらいれでけろてば。

運転手、強引に扉の内側に入ってきて扉を閉めてしまう。

運転手

やまねごさまがやってきてすまった。

猫  
ええー!?

山猫

(どんぐり達にそれはそれは大声で) 全体止まれ!!

どんぐり達、がやがやと止まる。まるで老人の団体旅行のような有様。

山猫

やかましー!!

どんぐり達、いづらか静かになる。

山猫

どんぐりー

どんぐり2

どんぐり3

どんぐりー

どんぐり2

どんぐり3

いいか？やかましくするとお前達の裁判は金輪際やらないからな。

それは困るだあよ。

んだんだうんと困る。

はやぐ何とかしてもらわないど夜も寝らんね。

おめえ昼寝してっぺ。

どっちでもいいがら早くお山に帰ろうよ。

せっかく出てきたんだから町ば見てぐべ。

それぞれどんぐり3のセリフに反応し返答する。大きな騒ぎ声になる。

山猫

どんぐり達

山猫

けんちゃん

運転手

けんちゃん

やかましー！！黙れ！！みな食い殺してやるぞ！！  
シーン！！

ここだな、（扉をノックする）

はい。

おれはきてないごどにしてける。

わかりました。じゃ、隠れて。

猫 おらもないことにしてな。

けんちゃん わかったよ。

山猫 みやざわけんじさんですか？

けんちゃん みやざわけんじです。

山猫 我が輩は山猫です。

けんちゃん ああ、山猫さん。

山猫 手紙が届いていると思うんだが。

けんちゃん はい、届いてますよ。(扉を開ける) あ、どうも。はじめまして。みやざわけんじです。

山猫 こちらこそ突然手紙などいたし失礼した。で、運転手が迎えに上がったはずなんだが、

けんちゃん いいえ、来ていませんが。

山猫 来てない？おかしいな。あんなに早く出たのに来ていないとは。

けんちゃん どこかで体の調子が悪くなって休んでいるとか、

山猫 いいや、あいつは丈夫なのが取り柄のやつでこの五十年病気なんかしたことがない。

けんちゃん でも、昨日か、今日あたりが運転手さんにとって初めての病気かもしれないじゃないですか。

山猫

なるほど、そういうこともあるかもわからんね。さすが我が輩の見込んでだけのことはあるお人だ。

どんぐりー

山猫様、早くしてけねすか？

どんぐりー

そのけんずさんとかいう方いだんだすべ？

山猫

ええい、また始まったな。やかましって何回言わせるんだ？

どんぐりー

おれたちも暇なわけじゃないんでねえ。

どんぐりー

んだんだ。

どんぐりー

はやくお山に帰ろうよ。

どんぐりー

いいや、せっかく出てきたんだから町は見えていく。

どんぐり達

(またもやガヤガヤし始める)

山猫

(恐ろしげな咆哮をあげる)

その咆哮に呼応して突風が吹き、雷が鳴る。

どんぐり達、首をすくめ静かになる。

どんぐりー

MGM映画のライオンみたいだなや。

どんぐりー

風の又三郎でも出てきそうな風だ。

どんぐりー

シート、山猫さまがにらんでるど。

山猫

けんじさん、これ以上どんぐり達を待たせるとんでもない騒ぎになるので、どんぐり達に顔を見せてやってはくれまいか。

けんちゃん

ぼくには裁判なんてできませんよ。それに山猫さんが吠えればどんぐり達も静かになるじゃありませんか。

山猫

甘い甘い。あいつらは怒られても、殴られても、蹴られても学習しない。すぐ忘れてしまう。我が輩ももう疲れてしまった。だって毎日裁判なんですよう！

けんちゃん

毎日裁判？

山猫

だからけんじさんに有無を言わさぬ判決を言い渡してもらわなければ我が輩はノイローゼで倒れてしまう。

けんちゃん

それは責任重大だな、ぼく責任のある仕事嫌いなんですよね。

山猫

我が輩だってそうですよ。本当なら山猫なんてのもやめてしまいたい。

けんちゃん

え？何になりたいんですか？

山猫

普通の猫が一番良い。世界無責任級チャンピオンだからねえ。

猫

(隠れているところで) ヘックション、

山猫

誰だ！？

けんちゃん

(ごまかし) 山猫さん、とりあえずビール。

山猫

けんちゃん

は？

いやいや「とりあえず」って言うのとビールって自動的に出てきてしまうんです。

山猫

けんちゃん

いいねえ、ビール！！

どんぐり達に会いましょう。

山猫

お願いいたす。

けんちゃん、山猫、扉から出る。

どんぐりー

あれがみやざわけんちゃんだべか？

どんぐり2

話の流れからいえばんだべな。

どんぐり3

イケメンじゃねえな。

どんぐり2

ここじゃなく早くお山に帰って裁判やろうよ。

どんぐり3

いいや、東京だかい町親分には最高裁判所だかい偉い裁判所があるっつうだ。そこで裁判やってもらおう。

どんぐり達

(またやかましくなる)

山猫

(けんちゃんに)ね？全然学習してないでしょう？

けんちゃん

まるで幼稚園児みたいだな。このままほっとくとどうなるのかな？

山猫

けんちゃん

山猫

はあ？

山猫さんはこれをしてください。（耳栓を渡す）

（それをして）ははあ、これはいい物があつたもんだ。

どんぐり達、とにかくやりたい放題始める。けんちゃんと遊びたがるどんぐり、勝手に楽器を弾き始めるどんぐり、歌うどんぐり、踊るどんぐり、一人でぶんぶん怒っているどんぐり、なんだか泣いているどんぐり、客いじりを始めるどんぐり、すべて個人的にやっている。これは幼稚園児というより精神病院の開放病棟のようでもある。

山猫は久しぶりの安息の日、ゆったりと目をつぶってのんびりしている。

どんぐりー

どんぐり2

どんぐり3

けんじさん、この中で一番偉いどんぐりは頭のとんがっているおれだよな？

いいや、一番偉いのは頭の丸いわしだって。

一番大きいのが一番偉い。頭が大きいってことは中身もいっぱい詰まってるってことだ。

またやかましくなる。

けんちゃん、変な歌にめちやめちやな振り付けで踊り出す。

どんぐり達、それをあっけにとられて注目する。

けんちゃん

ダ・ダ・スコ・ダー・ダー・ダー・ダー・ダー・ダー 馬鹿で間抜けで、めちやくちやで、雨にも風にも雪にも負けて、夏の暑さにめっぼう弱く、みんなにでくのぼうと呼ばれ、罵倒されるどんぐりが一番偉いんだ。ダ・ダ・スコ・ダー・ダー・ダー・ダー・ダー・ダー・ダー・ダー

無音の中でまどろんでいた山猫もけんちゃんの踊りに気づく。

どんぐり達、なんだか自然にけんちゃんの踊りに加わり一緒に踊り出す。

扉の陰から何事かと猫も運転手も顔を出す。

遠くから鹿踊りの太鼓と笛の音が聞こえてくる。

けんちゃん

どんぐり達

こんや異装のげん月のした

鶏の黒尾を頭巾にかざり

片刃の太刀をひらめかす

原体村の舞手（おどりこ）たちよ

ダ・ダ・スコ・ダー・ダー・ダー・ダー・ダー・ダー

こんや銀河と森とのまつり

准平原の天末線に

さらに強く鼓を鳴らし

うす月の雲をどよませ

ho hoi hoi

アンドロメダもかがりにゆすれ

ダ・ダ・スコ・ダー・ダー・ダー・ダー・ダー・ダー

どんぐりー

けんじさん、ありがとう。馬鹿で間抜けで、めちやくちゃで、雨にも風にも雪にも負けて、夏の暑さにめっぽう弱く、みんなにでくのぼうと呼ばれ、罵倒されるどんぐりなんてこの中にいないべ。

どんぐり2

ということはだ、誰も偉くないってことだ。

どんぐり3

そういうことだな。

どんぐり達

ありがとう、けんじさん。

どんぐり達、がやがやと帰っていく。

けんちゃん

山猫さん、なんだかみんな納得して帰っていききました。

山猫

いやあ！あれほど手こずった裁判をたった数分で片づけてくれた。すごいもんだ。

けんちゃん

ただ思ったことを言っただけです。

山猫

どうですか？これから我が輩の裁判所の名誉判事になってください。勿論お礼はいたします。

けんちゃん

いやお礼なんかありませんよ。

猫

（扉の陰から）バカ、お礼をもらわないとふるさとへ帰れないぞ。

山猫

（その声に気づき唸る）

猫

ヒエーッ、

山猫

猫だな？

けんちゃん

あ、山猫さん、扉の中の猫はぼくの飼い猫ですから食い殺すなんてことだけはしないでください。

山猫

猫を食い殺す？ほほう、何故それを知ってるんですかな？（ものすごい声で扉の中へ）おい、運転手！！

運転手

（へなへなと出てくる）

猫

（つられて出てくる）

山猫

やはり来ていたのか。

けんちゃん

すいません、ぼくが悪いんです。ぼくが運転手さんを匿ったんです。

山猫

何故匿ったんです？

けんちゃん

運転手さんはぼくを迎えに来てくれましたが、ぼくがその誘いに乗るの  
に手間取ったんです。そのうちに山猫さんとどんぐり達が着いてしまっ  
た。

山猫

それは誠か？

運転手

まごどまごど大竹まごど。

山猫

なにつまらないこと言ってるか！悪いことをしてもいないのに隠れると  
いう気持ちじゃ情けない。

運転手

やまねごさまはかんぜんしゆぎしやだがらあやまぢをみどめでくださら  
ねえ。だからこわくなったんです。

けんちゃん

山猫さん、人は山猫さんと違って色々な過ちや間違いを繰り返して成長  
していきます。何回も何回も同じ過ちを繰り返さないように、そう、あ  
のどんぐり達のようにならないように学習して大人になっていくん  
です。ぼくなんか何回道を誤ったり、間違いをしてきたかわからないく  
らいですよ。人はそういうもんだとあきらめて運転手さんにつきあつてく  
ださい。

山猫

けんじさん、我が輩と運転手のつきあいは先代の時からだから、もう…

運転手

けんちゃん

ごじゆうねんぐらいだが…、  
だったら気心が知れているはずじゃないですか。

山猫

山猫が人間を従えている。人間世界にはあってはならん構図だ。普通なら食い殺してる。あるいは我が輩が鉄砲で撃ち殺されている。しかしながら、我が輩たちはここまでなんとかやってきた。これを気心が知れているというのか？

けんちゃん

そうです。驚くべきことです。

猫

奇跡だね。

運転手

わがった、わだすがわるがった。しようじぎにやまねごさまをおむがえすればいがつたんだ。

山猫

そうだ、そうすれば変な疑いをもたずにすんだし、第一、我が輩はお前のことを心配したんだ。

運転手

すいませんでやんした。

山猫

それではけんじさん、これからもよろしくお願いいたします。

けんちゃん

名誉判事の件ですね？本当のことしか言えませんが、

山猫

それでけっこうです。帰るぞ。

運転手

はい。

猫

あ、

山猫

なんだ!?

猫

(けんちゃんの陰に隠れて) お礼は…?

山猫

おお、そうであった。けんじさん、黄金のどんぐり一升と、塩鮭のあた

まと、どっちがよろしいかな?

猫

なんじゃそりゃ、お金じゃないの?

山猫

お前には聞いておらん!!

猫

(驚いて逃げてしまう)

けんちゃん

それでは黄金のどんぐりをいただきます。

山猫

(運転手に) 黄金のどんぐり一升だ。足りなかったらメツキのどんぐりも入れてこい。早くしないとあいつらお山に帰ってしまうぞ。

運転手、いったん去る。

山猫

さて、それでは我が輩もお山に帰るといたしましょう。黄金のどんぐりは運転手が届けますので、いましばらくお待ちを。

けんちゃん

さようなら。

山猫

はい、さようなら。

山猫、オペラの一節など朗々と歌いながら去る。  
猫が恐る恐る出てくる。

猫  
なんだか怖い山猫だ。

猫  
けんちゃん  
それでもないよ。

猫  
けんちゃん  
しかし、お前さんも隅に置けない奴だな。

猫  
けんちゃん  
なんで？

猫  
けんちゃん  
お前さんのことだから塩鮭のあたまを選ぶんじゃないかと思った。

猫  
けんちゃん  
どっちにしようか迷ったんだけどね、

猫  
けんちゃん  
黄金のどんぐりなら換金できる。

猫  
けんちゃん  
ああ、そういうことか、

猫  
けんちゃん  
どういうことで黄金のどんぐりにしたんだよ？

猫  
けんちゃん  
なんか見てるだけで綺麗だと思ったんだ。

猫  
けんちゃん  
はあ！お前さんみたいな人を猫に小判みたいの人って言うんだらうなあ。

猫  
けんちゃん  
価値のわからない人のたとえだね。

猫  
けんちゃん  
人ごとだよ、

けんちゃん

きみは猫だけどお金の値打ちがわかるね。

猫

おらは事務所勤めだよ。お金の値打ちくらいわかるさ。

けんちゃん

へえ！

猫

お前さんたち人間と同じだ。

けんちゃん

そうなんだねえ。

猫

違うこともあるな。おらたちは気が向いたときしか働かない。

けんちゃん

ということとはほとんど働かないってことだ。

猫

それでも事務所勤めの猫は働くほうだぞ。

けんちゃん

そうかなあ、

猫

この世の猫たちの暮らしを良くするために、おらたちは働いてるのさ。

けんちゃん

そんな大義があつたんだ。

猫

事務所の壁にはそんなような標語が貼つてある。それにしても運転手さ

けんちゃん

んどんぐり持ってこないな。

けんちゃん

どんぐり達、お山に着いてしまったのかも知れないな。出発しようか。

猫

ええ？

けんちゃん

当てもなく待つのも大変だよ。

猫

黄金のどんぐりはどうするんだあ？

けんちゃん

猫

あの運転手さんならばくたがどこへ行こうと届けてくれるよ。  
(ため息混じり) 腹へった、塩鮭のあたまでも良かったなあ。

けんちゃん

駅に着いたら何か食べよう。

猫

お金ないんだらう？

けんちゃん

食べるくらいはあるよ。

猫

(急に元気になり) そうかい!!

猫、扉を背負う。

けんちゃん

爽やかなくだものにほいに充ち

つめたくされた銀製の薄明穹を

雲がどんどんかけている

黒曜ひのきやサイプレスの中を

一足の馬がゆっくりやってくる

ひとりの農夫が乗っている

もちろん農夫は体半分ぐらい

木だちやそこらの銀のアトムに溶け

猫

またじぶんでも溶けてもいいとおもひながら

あたまの大きな曖昧な馬といっしょにゆっくりくる

首を垂れておとなしくがさがさした南部馬

黒く大きな松倉山のこっちに

一点のダアリア複合体

その電灯の企画（プラン）なら

じつに九月の宝石である

じつに九月の宝石である

つむじ風の音とともに一人の少年が登場。少年は開放された空間から現れる。

少年

けんちゃん

少年

猫

けんちゃん

おい、

誰か呼んだ？

ここだよ。

（少年を指さし）あそこだ。

（少年のほうに向き直り）そんな所に、危ないぞ。

少年 トシさんから頼まれた。早く帰って来いってさ。

けんちゃん トシに頼まれた？君は誰だい？

少年 又三郎だ。

猫 玉三郎？

又三郎 下町の、じゃない。お前狸か？

猫 信じられないだろうが、これでも猫じゃ！！

又三郎 へえ！珍種だな。とにかく伝えた。じゃあな、

猫 おい、もう帰るのか？

又三郎 ああ俺は気が短いんだ。

猫 あのな、帰りたくても汽車賃がないんだ。

又三郎 なに？

猫 交通費だ。仕送りを頼んだそうだが、どうも行き違いになったのかもし  
れない。

又三郎 どうするんだよ？

猫 おいぼうず、

又三郎 又三郎だ。

猫 お金持っていないか？

又三郎

なんだよ、猫がお金必要なのか？猫に小判だろ？

猫

おらじゃない。この男、

又三郎

大の大人が子どもからお金借りるのか？

猫

(けんじに) おい、お前さんのことだぜ。ニコニコしてないで頼めよ。

けんちゃん

十倍にして返すよ。持っていないかい？

又三郎

俺、子どもだぜ。汽車賃になるくらいのお金持ってるわけないだろ？

けんちゃん

そうだよな。

猫

そりやそうだわな。

又三郎

でも、よく考えてみたらいいんじゃないか？子どもの俺でさえあんた

達を迎えに来られるんだ。あんたの実家ももうすぐだぜ。

けんちゃん

そうなのかい？

猫

いつの間にか近づいていたのか、

けんちゃん

もうすぐってことは、センダードの市役所？

又三郎

もっと近いよ。

けんちゃん

小岩井農場？

又三郎

行き過ぎ、

けんちゃん

そうか、イーハトーブにはまだ入っていないんだね？

又三郎

さあどうかな？

猫

お前、みのもんたか？早く教えろよ。

又三郎

おい、猫、

猫

「おい、猫」って、ぶしつけなやつぢやな、

又三郎

じゃあ名前は？

猫

まだない。

又三郎

まだない？名無しかよ。

猫

「まだない。」おらの名前だ。

又三郎

誰がつけた？

猫

猫の事務所の第二書記官がつけた。

又三郎

ヒットだな。

猫

ええ！？

又三郎

野生の勘でここがどこだかわからないか？

猫

野生の勘+なんてとうの昔にこたつの中に置いてきた。

又三郎

けんじさん、どうしたんだよ？すっかり喋らなくなって、省エネ芝居？

けんちゃん

いや考えてるんだよ。

又三郎

寝てるんじゃないの？石っこけんちゃ、起きろ！！（ト、けんじの頬をつねる）

けんちゃん

痛ッ！

猫

おらも、（ト、同じくけんじの頬をつねる）

けんちゃん

痛ッ！

又三郎

ここはどこだ？

けんちゃん

（遠くの音を聞くように）ポランの広場…、

猫

ポランの広場？聞いたことがあるような、ないような、なんだろうね、ポランの広場。

又三郎

野原の真ん中の祭りのあるところだ。

猫

でもここは野原の真ん中かい？

けんちゃん

そうだよ。だってほら楽隊がやってきた。

「ポランの広場」のメロディーを奏でる人を先頭に、ぞろぞろと色んな日用雑貨を持った連中がやってきた。  
指揮者に促されるようにけんじが歌う。

♪「ポランの広場」の歌

つめくさの花の咲く晩に

ポランの広場の夏まつり

ポランの広場の夏のまつり

酒を吞まずに水を吞む

そんなやつらがでかけて来ると

ポランの広場も朝になる

ポランの広場もしらばっくれる

つめくさの花のかをる夜は

ポランの広場の夏まつり

ポランの広場の夏のまつり

酒くせのわるい山猫が

黄色のシャツででかけてくると

ポランの広場に雨がふる

ポランの広場に雨が落ちる

## 楽隊の連中

ブラボー！！ブラボー！！

しかし、一人の男が立ち上がり、

パーゴ お世辞こいちゃいかんよ、どこがブラボーなんだ。

デーモ じゃあウマカボー!!!

パーゴ パーカ、わしが手本を聞かせてやる。ミュージック、スタート!!!

歌い出すが、そんなにうまい訳じゃない。

途中でファゼーロが歌い出す。

パーゴ なんだ失敬な、決闘だ決闘だ!!!

ミーロ おいパーゴ、気は確かか?こんな子ども相手に決闘とは。俺が相手にな  
ってやる。

パーゴ ほう、面白えじゃねえか、

ミーロ お前呑んでるな?

パーゴ おう、呑んでらあ。祭りの日くらい呑ませろってんだ。

ミーロ 酒癖悪い奴だよ、本当に。

デーモ おい、ミーロ。そんな奴は早いとこ片づけてしまえよ。

パーゴ

グワツハハハハ！お前らもまとめてかかってこい！

一斉にパーゴにかかっていく。あっけなく一秒で片が付く。

ミーロ

(けんじたちに) いやあ、飛んだところをお見せしてしまいました。面目ない。

猫

元はといえ、この子に歌わせたのが悪かったんだねえ。音痴だもの。

ファゼーロ

音痴じゃない。

猫

音痴だろ？

ファゼーロ

はい。

猫

よし、いい子だいい子だ。

ミーロ

ところであんた達は誰だい？

テーモ

そうだそうだ、見慣れない顔だ。

ファゼーロ

(猫に) それにあんたは狸か？

猫

信じられないだろうが、これでも猫じゃー！

楽隊

猫じゃ猫じゃー！！

一斉に楽団演奏し始める。のびていたパーゴも起きて演奏に加わる。

♪信じようと信じまいと猫じゃ猫じゃ（猫じゃ猫じゃ）

三角耳の猫じゃ猫じゃ（猫じゃ猫じゃ）

ざらざら舌の猫じゃ猫じゃ（猫じゃ猫じゃ）

昼間寝ている猫じゃ猫じゃ（猫じゃ猫じゃ）

居るとき居なくて居ないとき居る猫じゃ猫じゃ（猫じゃ猫じゃ）

猫じゃ猫じゃ猫じゃ猫じゃ

猫じゃらしじゃあ！！

猫

ミーロ

けんちゃん

又三郎

猫

パーゴ

猫

いやあ、ノリノリだあ！

で、どこから来たんだい？

ぼくはトキオから来ました。

僕は、モリーオ

おらもトキオだ。

トキオからやってきた割には田舎くさい。

お前さんも人のこと言える口か？

パーゴ

なに!?

テーモ

ほらほらまた喧嘩になるから(猫に)あんたも仕掛けない。

けんちゃん

あの、ここはポランの広場ですか?

楽隊

(一斉にけんじの方を向き)え?

けんちゃん

(ちよつとひるみ)ここはポランの広場ですか?

ミーロ

なぜそう思うんですか?

けんちゃん

風に乗って遠くからあなた達の楽器の音が聞こえてきて、

テーモ

聞こえてきて?

けんちゃん

それは「ポランの広場の歌」でした。そしてここが野原の真ん中だから

です。

ファゼーロ

ここが野原の真ん中?

パーゴ

ここが?

けんちゃん

ポランの広場の真ん中ではいつもお祭りをやっていて、あなた達もその

祭りに参加している楽隊なんでしょう?

テーモ

そうだといいいんだがなあ。

けんちゃん

どういうことですか?

パーゴ

わたしらはポランの広場に行こうとしてるんだ。

猫  
行こうとしてる?

ミール  
もう何年前になるかなあ、このファゼーロって子が乳飲み子の時からだから、ファゼーロ、いくつになった？

ファゼーロ  
十四歳だ。

パーゴ  
ってことはもうかれこれ三十年はポランの広場を探してるって事だ。

又三郎  
計算が合わないよ、おっさん。

テーム  
どうも近くまで来ているようなんだが、ポランの広場に行き着かない。

ミール  
迷路にはまりこんだように堂々巡りをしているようなんだな。

ファゼーロ  
ポランの広場探してるんだったら、やめた方がいいよ。人生棒に振ることにする。

パーゴ  
時間の無駄だ！

ミール  
無駄だ、

テーム  
無駄だ、

ファゼーロ  
M U D A D A、

パーゴ  
M U D A D A D A D A D A、

ミール  
ムダダムダダムダダ、

テーム  
ムダダムダダ、

楽隊、またも音楽に突入していく。これはアフリカの民族音楽のような  
雰囲気。

猫

いやあ！！ノリノリだあ！！

楽隊、楽しそうにけんじ達の回りを演奏しながら回る。

けんちゃん

そうか、

猫

なにが「そうか」なんだ？

けんちゃん

（楽隊へ）あなたたちがポランの広場なんですよ！

楽隊、演奏しながら去っていく。

猫

あなた達がポランの広場って、じゃあここがまたどこかわからなくなっ  
たじゃないか。

けんちゃん

（ニツコリして）そうだねえ。

猫

まったく迷子になったのを楽しんでるようだな。おい、ぼうず。

又三郎

又三郎だ。

猫 こうなったら頼みはお前さんだけだ。ここはどこなんだ？

又三郎 (手のひらを出す)

猫 (お手をする)

又三郎 じゃなくって、それにお前は猫だろ？猫がお手するなんて見たことない。

猫 じゃその手つきはなんだよ？

又三郎 (手のひらがオゼゼの形になる)

猫 現金なやつだな。(けんじに)おい、なんとか言ってやれよ。このぼうずお前さんが作り上げた物語のキャラクターだろ？

けんちゃん そうだけど、ぼくの手から離れてしまった登場人物はどうしようもないよ。

猫 責任もてよ、ほんとにもう！

又三郎 お金がなけりや違うものは？

猫 これでどうだ？猫大好きフリスキー！！

又三郎 俺は人間だ。

猫 取り付く島なし。(けんじに)助けてくれよ。

けんちゃん おい高田三郎。

又三郎 その名前を呼ぶな。

けんちゃん

どうした高田三郎、

又三郎

恥ずかしいから呼ぶなって、

猫

高田三郎、高田三郎、高田三郎、

又三郎

やめろ！！

けんちゃん

お父さんがモリブデンの鉱脈を探すために転勤するからまたどこか行くんだね？

又三郎

……、

けんちゃん

いいなあ、鉱脈を探す旅。ぼくのがれの仕事だ。

又三郎

だったらあんたがやればいいだろ？俺みたいなお子どもにやらせないで。どこの土地でも友達なんか一人も出来ない。

けんちゃん

あの谷川の岸の小さな小学校でもそうだった？ぼくは君のいた十二日間に一年分くらいの子どもたちの生活を詰め込んだんだだけ。

又三郎

……、

けんちゃん

もうあの歌も忘れたかな？

どっどど どどうど どどうど どどうど

青いくるみも 吹きとばせ

すっぱいかりんも吹きとばせ

どっどど どどうど どどうど どどうど

猫

どっどど どどうど どどうど どどう

(古びた文庫本を取り出し)『谷川の岸に小さな小学校がありました。教室はたった一つでしたが生徒は一年から六年までみんなありました。運動場もテニスコートくらいでしたがすぐうしろは栗の木のあるきれいな草の山でしたし、運動場の隅にはごぼごぼつめたい水を噴く岩穴もあったのです。さわやかな九月一日の朝でした。青空で風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。』

何人かの子どもたちが走ってやってくる。

子ども 1

(又三郎を見て) あいつだ。

子ども 2

赤毛のおかしなやつ、

子ども 3

赤毛のアンコだねえか？

子ども 2

それは赤毛のアンだ。

子ども 3

おれは赤毛じゃねえ。

子ども 1

おれも、

子ども 2

赤毛のあんたじゃなくて、アンって名前。

子どもー・3

ああああ、名前な。

子どもー

誰だ？時間にならないのに教室に入ってるのは、

子ども2

お天気の良い時に教室に入っていると先生に叱られっど。

子ども3

んだんだ、先生ごっしやぐどおっかねえど。

子どもー

早く出はってこ、

子ども2

早く、

子ども3

んでも、おかしなかつこだなや。やっぱしあいつはげえじんだ。

子ども2

シャツチョサン、ノンデケ、シャツチョサン、スケベハゲ、

子どもー

村長さんとこのフィリップンの嫁御ともちがう。

子ども3

アメリカ人がや？

子ども2

黒船で来たのが？

子どもー

今は江戸時代じゃねえって、

子ども2

わがった！あいつは風の又三郎だ。

子ども3

股がサブイ（寒い）なあ、ヘーックシヨイ！！風邪ひいたじゃい。風邪

子どもー・2

寒い！

子どもー

風の又三郎だとすると、二百十日で来たんだな？

又三郎

(突如大声で笑う)

子どもたち

(一瞬遅れて笑う)

子ども3

こらあ、何で笑った？

又三郎

二百十日で来たんじゃない。

子ども1

なんだや原作と違うぞ。

子ども2

そういう話だったか？

子ども3

じゃあなんで来たんだ？

又三郎

俺は俺の創り主を呼びに来た。

子どもたち

あの人だべ。

子どもたちけんじを見る。

又三郎

俺はモリブデンの鉱脈を親父と一緒に探しになんか行かない。もちろん転校を続ける友達の出来ない子どもでもない。みやざわけんじさん、けんじさんは俺を死の世界から呼び寄せた。

けんちゃん

(何か言いかけて)

又三郎

(子どもたちに)読んで、

子ども 1

(文庫を出し)『さわやかな九月一日の朝でした。青空で風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。黒い雪袴をはいた二人の一年生の子がどてをまわって運動場に入ってきて、まだ他に誰も来ていないのを見て、』

子ども 2

『ほう、おら一等だぞ。一等だぞ。とかわるがわる叫びながら大喜びで門を入ってきたのですが、ちよつと教室の中を見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合わせてぶるぶる震えました。が、ひとりはどうとう泣き出してしまいました。』

子ども 3

『というわけは、そのしんとした朝の教室の中にどこから来たのか、まるで顔も知らないおかしな赤い髪の子どもが一人一番前の机にちゃんと座っていたのです。』

猫

『変な子どもはやはりきよろきよろこつちを見るだけきちんと腰掛けています。そのとき風がどうと吹いてきて教室のガラス戸はみんながたがた鳴り、学校の後ろの山の萱や栗の木はみんな変に青白くなって揺れ、教室の中の子どもはなんだかにやつと笑って少し動いたようでした。』

又三郎

子どもたちはみんな俺のことを怖がった。子どもだけに感じるインスピレーションで俺が誰だかすぐわかったんだ。俺は死の世界からの使者さ。死んだ子が生きている子どもたちが死の世界の魅惑を語る。けんじ

さんの物語にいっぱい登場する死の世界へのあこがれは、けんじさんの修羅だ。楽しい美しい心が洗われるような物語の裏には常に死の影が覆っているのを子どもだけが感じていた。トシさんは誰よりもあなたの物語を理解していた。トシさんが逝ってしまう。

汽車の音。

汽車の客たち

ガタンコガタンコシユウフツフツ　ガタンコガタンコシユウフツフツ

猫

あれ？汽車がやってきた。

汽車の乗客たちはおのおの窓枠を持っている。このシーンでは猫も又三郎も子どもたちも汽車の客になる。

客1

こんな闇夜の原の中を行くときは、汽車の窓はみんな水族館の窓になる。

客2

乾いた電信柱の列がせはしくうつっているらしい。

客3

汽車は銀河系の玲瓏レンズ。

客4

けんちゃん

巨きな水素のリングの中をかけている。

リングの中を走っている。けれどもここは一体どこの停車場だ？枕木を焼いてこさえた柵が立ち、支手のある一列の柱はなつかしい陰影だけ出て来ている。

猫

黄色いランプが二つ点き、背高く青白い駅長の真鍮棒も見えなければ、実は駅長の影もない。

又三郎

その大学の昆虫学の助手は、こんな車室いっぱい液体の中で油のない赤髪をもじやもじやして、かばんにもたれて睡っている。

けんちゃん

わたしの汽車は北へ走っているはずなのに、ここでは南へかけている。

客1

焼杭の柵はあちこち倒れ、はるかに黄色の地平線。あやしい夜の陽炎とさびしい心意の明滅に紛れ、水色川の水色駅。

客2

汽車の逆行は希求の同時な相反性、こんなさびしい幻想から、わたしは早く浮かび上がらなければならぬ。

けんちゃん

トシはこんなさびしい停車場を、たった一人で通って行ったろうか？どこへ行くともわからないわからないその方向を、どの種類の世界へ入るともしれないその道を、たった一人でさびしく歩いて行ったろうか。

客3

トシさん、真っ青になって座っていたよ。

客4

眼は大きくあいてたけど、僕たちのことはまるで見えないようだったよ。

客 1

客 2

客 3

客 4

又三郎

けんちゃん

客たち

けんちゃん

客たち

けんちゃん

トシさん、青くて透き通るようだったよ。  
鳥がね、たくさん種まきの時のようにばあっと空を通ったの。でもトシさん、黙っていたよ。

お日さま、あんまり変に飴色だったねえ。

トシさん、ちっとも僕たちのこと見ないんだ。僕ほんとうにつらかった。

どうしてトシさん、僕たちのこと見なかったろう？ 忘れたんだろうか、あんなに一緒に遊んだのに。

トシが逝ってしまう？

あめゆじゆとてちてけんじや、

たしかにトシは自分の回りの目にははつきり見えている懐かしい人たちの声を聞かなかった。にわかには呼吸が止まり脈がうたなくなり、それからわたしが走っていったとき、あのきれいな眼がなにかをさがしめめるように空しく動いていた。それから後でトシはなにを感じたろう？

あめゆじゆとてちてけんじや

わたしがその耳元で遠いところから声をとってきて、空やリングや風全ての勢力の楽しい根源、万象回帰のそのいみじい生物の名を、ちからいっばいちからいっばい叫んだときトシは二へんうなづくように息をし

客たち

た。白い尖ったあごや頬がゆすれて、小さいときよくおどけたときにしたようなあんな偶然な顔つきにみえた。けれども確かにうなづいた。

あめゆじゆとてちてけんじや、

ガタンコガタンコシユウフツフツ　ガタンコガタンコシユウフツフツ、

汽車去っていく。

残ったけんじと猫。

猫　　なんであの汽車に乗らなかつたんだ？

けんちゃん　トシを奪い去る汽車だ。誰があんな汽車に乗れるもんか。

猫　　でも、お前さんだってトシさんの死を予感しているような口ぶりだったぞ。

……、

けんちゃん　あの又三郎とかいう坊主の言ったように死の世界へのあこがれか？

けんちゃん　トシは死なない！

ドアがノックされる。

猫 誰か来たぞ。

けんちゃん  
はい。

シグナレス  
すいません、この扉どけて。線路の上にあるので非常に危険なのよ。

猫 線路の上にあるの？

シグナレス  
そうなのよ。線路をふさぐように立ってるの。次の汽車があと一時間で

来るから早くどけてもらわないと、大変なことになるのよ。

猫 そりゃそうだなあ。

けんちゃん  
どけよう。

猫 「どけよう」じゃなくて、「どけてください」だろ？

けんちゃん  
どけてください。

シグナレス  
手伝うわよ。ほら、見上げたもんだよ。猫の手も借りたいくらいなんだぜ。

猫 ぼくも手伝うよ。

けんちゃん  
そうそう、そういう気持ちが大切だ。でも、まずはお顔拝見と、

猫、扉を開ける。

シグナレス

あら？猫？

猫

あれ？もう夜なの？あたり一面真っ黒びろうどの夜だよ。

けんちゃん

いいや、頭の上が星でいっぱいだ。

猫

見たこともない空の模様だ。扉を開けたら急に夜になってしまった。

シグナレス

よくあること。

猫

よくある？ま、おらなんか朝に寝はじめて気が付いたら真夜中だったなんて事はいっぱいあるけどな。起きてる間にこんなことになるなんてのは初めての経験だ。

シグナレス

大きな橙色の星が水平線から上がってきた。もうすぐ汽車が来る。

猫

地平線じゃないの？

けんちゃん

ここは夜の海の渚だ。

波の音。

猫

いつの間に海に来てたんだ？

シグナレス

水の底に赤いひとでがいます。銀色のなまこがいます。ゆっくりゆっくり這ってる。

猫

めざしが泳いでるぞ。お、あっちに泳いでるのはさんまの開きだ。(舌をぺろりと出し、魚を狙う)

シグナレス

もう何べん空がめぐったのかなあ。その間にいくつもの戦争があって何人も人が死に、何人も人が生まれた。

けんちゃん

トシ？

シグナレス

え？

けんちゃん

あなたはトシではないのですか？

シグナレス

トシ？そう呼ばれていたことがあるかも。

けんちゃん

顔も声もトシそのものなんだけど、

猫

じゃあトシさんだろう。

けんちゃん

でもどこか違うような気もする。

猫

どっちなんだよ？すいませんねえ、ほんとに手のかかるやつで、

シグナレス

ごめんね、わたしも覚えていなくて、

猫

いやいやそれより、あの青い星、どこかで見たことがあるんですけど、

シグナレス

地球。

猫

地球って、地球かい？

シグナレス

そう、地球。

猫

じゃあここはどこなの？

シグナレス

地球の鏡の星、

猫 はああん？

シグナレス

さあ、扉をどかすわよ。

呆然と空を見つめる猫をほっとき、シグナレスとけんじが扉を動かす。

シグナレス

はい、これで問題なし。危なく大事故だった。

けんちゃん

トシ、この地球の鏡の星でなにをしてるんだい？

シグナレス

私は、第三次から第四次へと悠久の線路をもつ樺太鉄道の信号係。

猫 これだね？（鉄道員の指差確認をまねる）

シグナレス

ナモサダルマプフンダリカサストラ、

猫 チャリサドルママフンダリケツタリケツニササール？

シグナレス

じゃあね。

シグナレス、去っていく。

けんちゃん

ナモサダル、マプフンダリ、カサストラ、

猫

チャリサドルママフンダリケツタリケツニササール。いいのか？トシさんじゃないのか？

けんちゃん

よく考えてみればわかることだよ。トシは実家の花巻で床に伏せっている。出てこられるわけがない。

猫

よく考えてみるでもわからないことだらけだけだな。(空を見て)あれ？地球が無くなってるとぞ。またわからないことが増えた。

けんちゃん

(猫を見てにっこり)早く帰ろう。花巻でいっぱい新作が書けそうだ。

農民たちが走ってやってくる。

農民1

お？けんちゃん、でねえか？

農民2

んだ、けんちゃん、けんちゃん。

農民3

待ってたぞい！

農民4

おらたちの先生さまがやってきたぞい！

農民5

これで夏の日照りも冷害も乗り切れる。

農民1

レコード演奏会やってける。

農民2

読書会もだ。

農民3

石この話も、

農民 4

農民 5

農民 1

農民たち

農民 3

猫

農民 1

農民たち

東京の話も、

童話も読んで下さい。

万歳だ！

万歳万歳万々歳！！

(猫に)ところであんだは狸すか？

猫じゃあ！！猫じゃ猫じゃ、(一人で乗っている)

(ほっといて) 胴上げでもやっぺが？

やっぺやっぺ！！

けんちゃん、農民たちに胴上げされそうになり、ゆっくり前へ進み出る。

群読「雨にも負けず」

雨にも負けず

風にも負けず

雪にも夏の暑さにも負けぬ

丈夫なからだをもち

慾はなく

決して怒らず

いつも静かに笑っている

一日に玄米四合と

味噌と少しの野菜を食べ

あらゆることを

自分を勘定に入れずに

よく見聞きしわかり

そして忘れず

野原の松の林の陰の

小さな萱ぶきの小屋にいて

東に病気の子供あれば

行って看病してやり

西に疲れた母あれば

行ってその稲の束を負い

南に死にそうな人あれば

行ってこわがらなくてもいいといい

北に喧嘩や訴訟があれば

つまらないからやめろといい

日照りの時は涙を流し

寒さの夏はおろおろ歩き

みんなにでくのぼーと呼ばれ

褒められもせず

苦にもされず

そういうものに、

わたしは、

なりたい。

あの運転手がやってくる。

猫 運転手

いやあおまつどうさまでしたあ！！ちんのどんぐりしとますだあ！！  
あんだ誰？

運転手

けんちゃん

ありやわせだのすかわ。ほれいつばんさいしよのほうでとうじょうしたすべ？やまねこさまのうんてんすだ。

やっぱり山猫様は忘れていなかったんだ。

宮沢賢治の作品の多くから部分引用しています。

詩集「春と修羅」より「原体剣舞連」「無声慟哭」「青森挽歌」「樺太鉄道」「風景とオルゴール」など

童話「どんぐりと山猫」「風の又三郎」「ポラーノの広場」など

「雨ニモマケズ」手帳